

日本気象学会 2014 年度秋季大会 出展・協賛・後援 企業・団体等一覧

今大会の開催にあたり、以下の企業・団体からご出展・ご協賛をいただきました（2014年9月2日現在；50音順）。厚く御礼申し上げます。（*は会場内に併設されるブースにて展示を行う予定の企業・団体です。）

<出展・協賛>

HPCシステムズ株式会社*

株式会社ニューテック*

株式会社日立パワーソリューションズ*

サイバネットシステム株式会社*

日本無線株式会社*

三菱電機特機システム株式会社*

<協賛>

英弘精機株式会社

株式会社朝倉書店

全日本空輸株式会社

日本気象学会 2014 年度秋季大会

会期：2014年10月21日（火）～23日（木）

会場：福岡国際会議場（福岡市博多区石城町） <http://www.marinemesse.or.jp/congress/>

大会実行委員会担当機関：福岡管区気象台，九州大学，福岡大学

大会委員長：隈 健一（福岡管区気象台長）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局（福岡国際会議場4階小会議室407）
福岡国際会議場（代表 TEL：092-262-4111）

会場案内図



(1) 福岡空港からJR博多駅まで

【地下鉄】空港線：博多駅で下車。所要時間約6分・料金260円

(2) JR博多駅から会場（福岡国際会議場）まで …博多駅周辺地図参照

【バス】福岡センタービル前Eのりば（地図中B地点）から乗車

- ① 路線名99番「博多埠頭行」：国際センターサンパレス前バス停で降車
- ② 路線名88番「中央埠頭行」：国際会議場サンパレス前バス停で降車
ともに所要時間約11分，料金230円，バス停から会場まで徒歩1～2分

【地下鉄】

- ③ 空港線：中洲川端駅で貝塚線へ乗換，貝塚線：呉服町駅で下車
所要時間約7分・料金200円（福岡空港から約13分・料金260円），
呉服町駅から会場まで徒歩約15分
- ④ 空港線：天神駅で下車
所要時間約6分，料金200円（福岡空港から約12分・料金260円），
天神駅からは（3）参照

【タクシー】所要時間約10分，料金1,000円程度



(3) 地下鉄・西鉄天神駅から会場（福岡国際会議場）まで …天神駅周辺地図参照

【バス】ソラリアステージ前2Aのりば

（地図中B地点）から乗車

- ⑤ 路線名80番「中央埠頭行」：
国際会議場サンパレス前で降車
所要時間約9分・料金190円，
バス停から会場まで徒歩1分程度

【タクシー】所要時間約6分，料金800円程度



大会行事予定

A 会場 : 中会議室 502・503 号室 (5 階) シンポジウム・授賞式会場: 国際会議室 501 号室 (5 階)
 B 会場 : 中会議室 409・410 号室 (4 階) 受付 : 4 階ロビー (4 階)
 C 会場 : 小会議室 401・402・403 号室 (4 階) 大会事務局: 小会議室 407 号室 (4 階)
 D 会場 : 小会議室 404・405・406 号室 (4 階) 懇親会 : 福岡サンパレス ホテル&ホール 2 階
 ポスター会場: 中会議室 411・412 号室 (4 階) サンパレスルーム B

() 内は講演数と講演番号

		A 会場	B 会場	C 会場	D 会場
10月21日 (火)	09:45～ 12:30	熱帯大気・台風 (18, A101～A118)	スペシャル・セッション 「高速スキャンレーダーによる激しい大気現象の観測: 現状と将来展望」 (16, B101～B116)	大気放射 (9, C101～C109)	雲物理 (7, D101～D107) 11:00～ スペシャル・セッション 「日本の豪雨・豪雪と黒潮」 (8, D108～D115)
	13:30～ 17:00	気候システム I (23, A151～A173)	スペシャル・セッション 「惑星大気科学の現在」 (18, B151～B168)	スペシャル・セッション 「温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT 「いぶきの研究成果と今後」 (18, C151～C168)	スペシャル・セッション 「ハイパフォーマンスコンピューティングによる超高精度メソスケール気象予測」 (19, D151～D169)
	17:00～ 18:00	ポスター・セッション (110, P101～P160)			
10月22日 (水)	09:10～ 12:00	データ同化 (7, A201～A207)	降水システム (20, B201～B220)	中層大気 (13, C201～C213)	物質循環 (21, D201～D221)
	10:20～	スペシャル・セッション 「室内実験で気象学」 (10, A208～A217)			
	13:00～ 13:30	山本賞・正野賞・堀内賞・奨励賞授与			
	13:30～ 15:30	山本賞・正野賞・堀内賞・受賞記念講演			
	15:40～ 17:55	シンポジウム「惑星大気研究の最前線」 司会: 中島健介 基調講演: 田村元秀, はしもとじょーじ, 今村 剛, 高橋芳幸			
	18:10～ 20:10	懇親会			
10月23日 (木)	09:10～ 11:30	気候システム II (13, A301～A313)	中高緯度大気・相互作用 (8, B301～B308) 気象教育 (5, B309～B313)	観測手法 (14, C301～C314)	大気境界層 (8, D301～D308) 大気力学 (6, D309～D314)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (110, P301～P360)			
	13:30～ 17:00	スペシャル・セッション 「全球降水観測計画「GPM」コア衛星初期データと新たな降水観測」 (16, A351～A366)	スペシャル・セッション 「南岸低気圧による大雪: その要因, 実態, 予測可能性」 (21, B351～B371)	スペシャル・セッション 「放射観測に関する気象学・気候変動研究の進展」 (16, C351～C366)	スペシャル・セッション 「大気-陸面間の水・エネルギー・炭素フラックスに関する最新研究 2014」 (11, D351～D361) 15:40～ スペシャル・セッション 「防災気象情報」 (7, D362～D368)

発表件数: 552 件 (口頭発表 332, ポスター 220)

口頭発表の講演・質疑時間: 6 分と 2 分

当大会予稿集に掲載された研究発表の文章・図表を複製あるいは翻訳して利用する場合には、日本気象学会の文書による利用許諾を得た上で出所明示して利用しなければなりません。ただし著作者自身による利用の場合は、利用許諾の申請は不要です。

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは、〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1 気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (e-mail: kouenikaku2014a@mri-jma.go.jp) まで。

大会参加費・懇親会費

大会参加費

- 大会参加費は以下の表の通りです。

大会参加費		
種別	前納	当日
講演者 A	8,000 円	—
講演者 B	5,000 円	—
聴講者	3,000 円	4,000 円

- 講演者の種別：
講演者 A：研究機関・大学に所属する講演者（ただし、学部生・院生は除く）
講演者 B：講演者 A に該当しない講演者
- 講演件数が 2 件の場合も大会参加費は変わりません（講演件数による加算はありません）。
- シンポジウムのみに参加する場合は、参加費は無料です。

懇親会費

- 懇親会費は以下の表の通りです。

懇親会費		
種別	前納	当日
一般	5,000 円	6,000 円
学生	4,000 円	4,500 円

支払方法

- 講演者の参加費の支払い方法は前納のみとなっており、既に受付は締め切られています。
- 懇親会費及び聴講者の参加費を前納する場合は、大会ホームページにて 2014 年 8 月 19 日（火）までにお支払下さい（郵便振替の場合は 2014 年 8 月 12 日（火）まで）。それを過ぎた場合は当日払いとなります。

領収書

- 領収書は参加者本人の名義で、大会当日受付にて名札と一緒に手渡される予定です。
- 名義の変更が必要な場合には再発行が可能ですので、大会当日受付にてお申し出下さい。

その他

- 一旦支払われた参加費・懇親会費は返却いたしません。
- 参加費・懇親会費には会員・非会員の区別はありません。
- 非会員の方も規定の参加費・懇親会費をお支払い頂ければ大会・懇親会に会員と同様に参加することができます。

講演の方法

口頭発表（スペシャル・セッションを含む）

- 一般口頭発表の講演 1 件あたりの持ち時間は 8 分（講演 6 分・質疑 2 分）です。
- スペシャル・セッションの発表時間については世話人からの指示に従ってください。
- 講演には PC プロジェクターを使用できます。
- 講演にあたり、予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応をとることがあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦 210 cm×横 90 cm 程度となっています。
- ポスターの掲示には画鋏・ピンが使用できますが、テープ類は使用できません。これらは発表者自身で準備してください。
- ポスターの掲示可能時間は以下の通りです。会場の都合上時間厳守でお願いします。
 - ✓ 第 1 日の発表者は 10 月 21 日 13:00～18:00
 - ✓ 第 3 日の発表者は 10 月 23 日 09:00～13:00
- ポスター会場での機器の使用は、講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

保育施設の紹介について

大会実行委員会では、大会期間中の保育施設の斡旋を行います。利用施設と補助金額は下記の通りです。

利用施設：

「福岡リトルワールドぎおん園」 (<http://little-world.jp/gion>)
「にしてつ保育園ピコラン薬院」 (<https://picoran.jp/>)

補助金額：

保育に要した費用（保育施設利用料＋交通費上限1000円）の 3分の2。

利用を検討されている方は、お気軽に下記担当者にご連絡ください。

連絡先： 川野 哲也（九州大学大学院理学研究院）

E-mail： hoiku2014@geo.kyushu-u.ac.jp

TEL： 092-642-2676

シンポジウム「惑星大気研究の最前線」

日時：大会第2日（10月22日〔水〕） 15:40～17:55

会場：福岡国際会議場（福岡市博多区石城町2-1） 501号室（国際会議室）

司会：中島健介（九州大学）

※シンポジウムの聴講は無料です。一般の方も参加できます。

趣旨

かつて惑星は夜空の「彷徨える星」に過ぎませんでした。観測技術の発展と探査の実現を経た現在、それぞれの環境と歴史を有する地球と同等の「世界」として認識されています。惑星の大気の成り立ちや、そこに見られる現象の探求から生まれた「惑星気象学」も高度に発展し、幅広い問題と繋がりを持つに至っています。大気運動の多様性は地球流体力学に新しい問題意識を提供しており、大気の組成や量の多様性は太陽系全体の形成や進化に関する考察に繋がっています。探査も各惑星で進展しており、特に火星では質量とも充実した探査が数値モデリングの高度化を促し、地球と同様のデータ同化も行なわれています。金星も、来年末に金星周回軌道に到達する日本の「あかつき」による本格的な大気探査を控えています。こうした太陽系惑星研究の蓄積を待っていたかのように、1995年、ついに太陽以外の星を回る「太陽系外惑星」が発見され、20年目の現在、その数は1000個を超えています。その多様性は我々の太陽系内の諸惑星を遥かに上回る一方、生命の想定も可能な「第二の地球」が見いだされる可能性も近づいています。今回のシンポジウムでは、太陽系外惑星も含めて急速に視野を広めつつある惑星大気研究の最前線を提示し、今後を展望します。参加者の皆様には、併せて、「地球気象学」の位置と、その果たし得る役割についても思いを巡らせて頂ければ幸いです。

基調講演

「太陽系外惑星－発見20年で見えてきたもの」
「水惑星の形成と進化」
「金星気象衛星『あかつき』と今後の惑星大気研究」
「惑星大気モデリング－探査・系外惑星をにらんで」

田村元秀（東京大学）
はしもと じょーじ（岡山大学）
今村 剛（JAXA）
高橋芳幸（神戸大学）

総合討論

スペシャル・セッションの概要紹介

高速スキャンレーダーによる激しい大気現象の観測：現状と将来展望

日時：大会第1日（10月21日）09:45～12:30

場所：B会場

趣旨：近年、竜巻・局地的大雨・落雷といった激しい大気現象による災害が報告されている。たとえば2012年5月6日につくば市周辺で発生した竜巻は1名の死者を出した。これらの現象は積乱雲によってもたらされ、しばしば短時間で急発達する。これらの現象のメカニズムを解明し、探知・短時間予測を実現されるためには、従来のレーダーよりも観測間隔の短い高速スキャンレーダーが必要である。本スペシャルセッションは、最近よく取り上げられている高速スキャンレーダーに焦点を当て、最新の観測技術、事例解析、さらに運用について情報交換を行うことを目的として、以下のテーマを取り上げる。

- (1) 高速スキャンレーダーに関する最新技術：フェーズドアレイ、セクタースキャン、レーダーネットワーク等
- (2) 高速スキャンレーダーによるこれまで捉えられなかった積乱雲の発生発達・内部構造など様々な事例解析
- (3) 雲内の放電3次元分布など、高速スキャンレーダーで得られた積乱雲の3次元全体像と他の観測データとの

組み合わせによる更なる発展性

- (4) 高速スキャンレーダーで捉えた激しい大気現象の探知・短時間予測・データ同化の将来計画
世話人：楠 研一（気象研）、牛尾知雄（阪大）、佐藤晋介（NICT）

日本の豪雨・豪雪と黒潮

日時：大会第1日（10月21日）11:00～12:30

場所：D会場

趣旨：日本では、梅雨前線に伴う豪雨、台風に伴う暴風雨、日本付近で急発達する爆弾低気圧に伴う豪風雨・豪風雪、およびそれらによる災害が毎年のように発生しており、これらの豪雨・豪雪の予測精度の向上が重要な課題となっている。最近の研究で、日本周辺の海洋がこれらの大気擾乱に与える影響について知見が集積されてきた。本セッションでは、これらの豪雨・豪雪や、原因となる大気擾乱について、日本周辺の海洋の影響、特に黒潮・黒潮続流の影響に着目して、様々な観点から検討したい。まとまった研究のほか、萌芽的研究、現業的な調査・研究、若手による研究の発表も歓迎する。

世話人：児玉安正（弘前大学大学院理工学研究科）、万田敦

昌(長崎大学大学院水産), 茂木耕作(海洋研究開発機構), 津口裕茂(気象庁気象研究所), 川村隆一(九州大学大学院理学研究院), 中村 尚(東京大学先端科学技術研究センター)

惑星大気科学の現在

日時: 大会第1日(10月21日) 13:30~17:00

場所: B会場

趣旨: 20世紀後半に, 太陽系諸惑星の大気現象の考察することから出発した惑星大気科学は, 各惑星の探査の進展, 数値モデリングの本格化, 地球流体力学の理論の深化, 太陽系・惑星進化との関わりでの認識を経て多方向に発展してきたが, 現在, 数百を超える太陽系外惑星の発見を迎えて, さらに対象と問題意識を広げつつある. 2014年度秋季大会ではシンポジウムとして「惑星大気研究の最前線」が企画されており, 惑星大気研究の現状と将来の概要について, 基調講演が行なわれる予定である.

当スペシャルセッションでは, このシンポジウムと相補的な内容の幾つかの招待講演を設定し, 基調講演に限られた時間ではカバーできない広がりや深さにおいて, 惑星大気科学の到達点と将来の課題を展望する予定である. あわせて, 惑星大気に幅広くかかわる一般講演も募集し, 今後の研究の展開に向けた議論の契機としたい.

世話人: 高木征弘(京都産業大学理学部), 今村 剛(JAXA宇宙科学研究所), 高橋芳幸(神戸大学大学院理学研究科), 中島健介(九州大学大学院理学研究院)

温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT「いぶき」の研究成果と今後

日時: 大会第1日(10月21日) 13:30~17:00

場所: C会場

趣旨: 2009年1月23日に打ち上げられた温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT「いぶき」は, 5年を過ぎた現在も順調に観測を続けている. これまでに, データ導出手法の改良や導出データの検証を通して GOSAT データの質の向上を図り, それを基に, 主要な温室効果ガスである二酸化炭素やメタンの濃度分布とその変動の把握, 地域別吸収排出量(収支)の推定と不確実性の低減に関する研究を実施してきた. 本セッションでは, まず衛星やセンサーの稼働状況とプロダクトの提供・利用状況を紹介し, これまでの研究の成果について発表を行う. さらに今後の GOSAT の運用計画や, GOSAT 後継機の計画についても対象とする. そのため, GOSAT の短波長赤外や熱赤外の観測データを利用した基礎・応用研究のみならず, 関連する地上・航空機観測や GOSAT 搭載の雲・エアロソルセンサデータの利用, データ同化・大気輸送モデル・炭素収支推定に関わる研究, さらに将来計画など, 幅広い分野にわたる発表を募集する.

世話人: 横田達也(国環研), 川上修司(JAXA), 今須良一(東大大気海洋研), 中澤高(東北大), 中島映至(東大大気海洋研)

ハイパフォーマンスコンピューティングによる超高精度メソスケール気象予測

日時: 大会第1日(10月21日) 13:30~17:00

場所: D会場

趣旨: 2012年度気象学会秋季大会において, スペシャルセッション「次世代スパコンが拓く超高精度メソスケール気象予測」を開催し「京」に代表される次世代のスパコン利用を念頭において, メソスケール顕著現象の高精度予測と高解像度大気モデルを用いた基礎研究に関する当時の到達点と課題について確認した. HPCI 戦略プログラム分野3のサブ課題「超高精度メソスケール気象予測の実証」では, 「領域雲解像4次元データ同化技術の開発」, 「領域雲解像アンサンブル解析予報システムの開発と検証」, 「高精度領域大気モデルの開発とそれを用いた基礎研究」の3つの科学目標に沿って, 2011年から, 京の計算資源をメソスケール気象予測研究における科学的ブレークスルーとして活用するための研究を行ってきた. 2012年10月のスパコン「京」の共用開始から約2年を経て, このセッションでは, 上記研究の進捗について報告するとともに, 他の計算機も含むハイパフォーマンスコンピューティングインフラでのメソスケール気象研究の現状と将来について議論したい. HPCI 戦略プログラム以外からの投稿も歓迎する.

世話人: 斉藤和雄(気象研究所/海洋研究開発機構), 露木義(気象研究所), 瀬古 弘(気象研究所/海洋研究開発機構), 木村富士男(海洋研究開発機構)

室内実験で気象学

日時: 大会第2日(10月22日) 10:20~12:00

場所: A会場

趣旨: 今年は, 瓜生道也先生(九州大学)の25回忌にあたる. 瓜生先生は, 回転水槽実験装置を用いた気象学的な研究の第一人者であり, その後の室内実験研究の道を示した先駆者である. 回転水槽実験などの室内実験は, コンピュータの発展とともに数値実験へと受け継がれながら, 現在でも観測や理論を検証するための科学的実験装置として多様性も増している. さらに, 可視化技術の進歩により, 実験結果の深い解析が可能になっている. 装置製作や制御が手軽になったことによって, 教育現場などでのデモンストレーションとして利用も増えている. メモリアルにあたる今年, この九州の地で, 室内実験を用いた気象に関わる多種多様な実験が集まるセッションを開催し, 実験手法や解析方法の新技术の情報交換や議論が出来る場としたい.

世話人: 乙部直人(福岡大学理学部), 筆保弘徳(横浜国立大学教育人間科学部), 廣岡俊彦(九州大学大学院理学研究院), 中島健介(九州大学大学院理学研究院), 佐藤正樹(東京大学大気海洋研究所)

全球降水観測計画「GPM」コア衛星初期データと新たな降水観測

日時: 大会第3日(10月23日) 13:30~17:00

場所: A会場

趣旨: 全球降水観測計画「GPM(Global Precipitation Measurements)」は, 日米(JAXA/NASA)を中心とした各国宇宙機関の協力で進められている. 日米共同開発のGPM主衛星は, 2014年2月28日に種子島宇宙センターから打上げられた. 本衛星にはJAXAと情報通信研究機構

が開発した二周波降水レーダ (DPR) が搭載されている。熱帯降雨観測衛星 TRMM 搭載のレーダと同様の Ku 帯に固体降水にも感度を持つ Ka 帯を加えて、北緯 65 度から南緯 65 度までの降水の 3 次元観測を可能にする。GPM は、この DPR 観測を核に、マイクロ波放射計搭載のコンステレーション衛星 (GCOM-W1 を含む) が連携し、ほぼ全球の降水を高頻度高精度で測定する計画である。本セッションでは、GPM 主衛星から得られた初期的なデータを検討する予定である。また GPM によって期待される新たな降水観測について議論し、より多くの気象研究および応用研究への有効利用を促進することを目的とする。

世話人：沖 理子 (宇宙航空研究開発機構)、高藪 縁 (東京大学大気海洋研究所)、中村健治 (獨協大学)、井口俊夫 (情報通信研究機構)、牛尾知雄 (大阪大学)、青梨和正 (気象研究所)

南岸低気圧による大雪：その要因、実態、予測可能性

日時：大会第 3 日 (10 月 23 日) 13:30~17:00

場所：B 会場

趣旨：平成 26 年 2 月 8 日から 9 日、そして 2 月 14 日から 16 日にかけて、急速に発達する南岸低気圧の接近に伴って関東甲信地方を中心に記録的な大雪となった。特に後者の事例では観測史上最深積雪を大きく上回る積雪が観測され、記録的な大雪となった。このため、山梨県全域が一時陸の孤島になり、交通障害や通常積雪のほとんどない地域でアーケード等の損壊、人身被害が多く発生した。

この記録的な大雪の要因としては、ブロッキングによる低気圧の動きの遅さ、南から多量の水蒸気の供給、下層の低温の維持が指摘されている。南岸低気圧に伴う降雪は珍しくないが、これほどまで顕著な大雪になったのはなぜか、メソスケールの降水・降雪系や環境場、降雪粒子にはどのような特徴があり、どのような特性の積雪になったのか、何が大雪につながる要因として重要なのか、そしてそれらは予測可能なのか。これらの課題について、調査結果を一堂に集め、全体的な共通認識を持つための議論をする場としたい。南岸低気圧による降雪全般についての話題提供を歓迎する。

世話人：中井専人(防災科学技術研究所雪氷防災研究センター)、荒木健太郎(気象庁気象研究所)、前多良一(気象庁気象大学校)

放射観測に関する気象学・気候変動研究の進展

日時：大会第 3 日 (10 月 23 日) 13:30~17:00

場所：C 会場

趣旨：気象学および気候変動研究における放射観測の目的は、大きく二つに分けることができる。一つは、大気・地球表面の放射エネルギー収支を評価することであり、もう一つは、放射観測を利用して、気温、水蒸気、雲、エアロゾルおよび微量気体等の大気に関する情報を得ることである。現在では、地上、船舶、航空機、人工衛星など、様々なプラットフォームから観測が行われている。放射観測に用いる波長も紫外域から可視、赤外、マイクロ波にまで及ぶ。取得されたデータは放射計算を用いた解析のみならず、数値予報モデルにおけるデータ同化や気候モデルによる計

算結果との比較、あるいは植物生態学における光合成の評価まで多様な分野で利用されている。また、新しい放射計や校正手法の開発により技術面においても進歩している。本セッションにおいては、放射観測が気象学および気候変動研究に対してどのように貢献してきたのか振り返り、また、今後の展望について議論する。

世話人：早坂忠裕 (東北大学)、大河原望 (気象庁)、高村民雄 (千葉大学)、内山明博 (気象研究所)、三枝信子 (国立環境研究所)、藤谷徳之助 (国立環境研究所)

大気-陸面間の水・エネルギー・炭素フラックスに関する最新研究 2014

日時：大会第 3 日 (10 月 23 日) 13:30~15:30

場所：D 会場

趣旨：大気境界層の中で発生する様々な現象には地表面からの水・熱・炭素循環(WEC 循環)が本質的な役割を果たしている。そのため、これまで世界各地にフラックスタワーが構築され、WEC 循環の時空間変動が明らかにされてきた。各種フラックスの観測値は実況監視の用途にとどまらず、リモートセンシングや全球・領域モデルの検証データとして使用されている。このことから、地上観測-リモートセンシング-数値モデルの相互補完の関係は WEC 研究において特に強いといえる。しかしながら、分野横断型の研究課題が多いために WEC 循環を扱う研究者が一同に会する機会には豊富ではなかった。

本分科会は、WEC 循環に関する観測・モデル・リモートセンシング研究について情報共有や新たな課題の創出を目的とする。昨年の秋季大会に行った「フラックス最新研究 2013」では気象学を専門とする研究者の他、農業気象学や生態学といったバックグラウンドを持つ多くの研究者からホットな話題を提供していただいた。本年も昨年に引き続き、フラックス研究に日頃携わる大学院生、若手研究者を中心に対象スケールや研究手法を問わずに最新の研究についての講演を募り、研究動向や今後の方向性を情報交換する機会としたい。

世話人：吉田龍平 (東北大院理)、佐々井崇博 (筑波大生命環境)、小谷亜由美 (名大院生農)

防災気象情報

日時：大会第 3 日 (10 月 23 日) 15:40~17:00

場所：D 会場

趣旨：防災情報、防災気象情報とは何であろうか。

近年、科学技術の進歩と災害の教訓などによって、防災情報も気象情報もめざましく高度化し、多様化してきている。

また、社会的なニーズの高まりを受け、気象庁や日本気象予報士会をはじめ様々な機関が、小学生から高齢者まで様々な機会をとらえて、気象講座や防災気象啓発に盛んに取り組み始めている。

このような情勢の中、このセッションでは、様々な立場から、災害時にどのように気象情報が利用されたのか (または、されなかったのか) といった事例や防災気象情報の教育啓発活動の取組事例などを発表していただき、その活用事例や課題等を明らかにするとともに、防災気象情報のより適切な利用や伝達、並びに防災啓発や防災教育に必要なこと (伝えるべきこと) などについて議論

を深める機会としたい。

世話人：岩田 修 (日本気象予報士会), 金崎 厚 (日本気象予報士会), 弘中秀治 (宇部市役所), 永田統計 (日本

気象予報士会), 中尾克志 (日本気象予報士会), 難波良彰 (日本気象予報士会), 荒川知子 (日本気象予報士会), 岡留健二 (日本気象予報士会)

研究会のお知らせ

大会期間中とその前後に以下の研究会が予定されています。興味のある方はご自由にご参加下さい。

第42回メソ気象研究会

日時：2014年10月20日(月)13:15~17:15

場所：九州大学西新プラザ(福岡県福岡市早良区西新2丁目16-23) <http://www.kyushu-u.ac.jp/university/institution-use/nishijin/infomap.htm>

テーマ：「メソ気象学・雲物理学における航空機利用」

内容：気象学において航空機は観測の重要なプラットフォームで、様々な目的に利用されている。今回のメソ気象研究会では、メソ気象学と雲物理学における航空機を利用した観測に焦点をあてて、現状はどのような利用がなされているのか、それはどのような新しい知見をもたらすのか、さらにこの分野の航空機利用にはどのような観測が期待されるのかを中心に、これまで航空機を利用した観測を行ってこられた方々から話題を提供していただく。米国では専用機による観測が行われており、台湾でも台風をターゲットとした航空機観測がルーチ的に近い形で行われるようになった。本研究会では台湾大学から航空機観測を実施している研究者を招待し、台湾での研究の現状を講演いただく。また国内の航空機を利用した観測研究の最先端にいる方々から話題を提供していただく。本研究会ではメソ気象学・雲物理学ではどのような観測の可能性と期待があるのかについて探っていきたい。

プログラム：

- 13:15-13:20 趣旨説明
- 13:20-14:00 Typhoon observations using aircrafts: DOTSTAR and beyond
Chun-Chieh Wu (National Taiwan University)
- 14:00-14:30 熱帯低気圧観測における航空機の利用
山口宗彦 (気象研究所)
- 14:30-15:00 航空機観測の現状と課題ー雲物理からメソ気象までー
村上正隆 (気象研究所)
- 15:00-15:15 休憩
- 15:15-15:45 無人航空機の民生利用における課題と展望
原田賢哉 ((独)宇宙航空研究開発機構)
- 15:45-16:15 メソ気象研究用専用航空機への期待
上田博 (名古屋大学地球水循環研究センター)
- 16:15-16:45 コメンテーターからの意見
佐藤正樹 (東京大学大気海洋研究所)
篠田太郎 (名古屋大学地球水循環研究センター)
- 16:45-17:15 総合討論

世話人：坪木和久 (名大地球水循環), 加藤輝之 (気象研究所), 小倉義光 (東大地球海洋研)

連絡先：坪木和久 (名大地球水循環)

E-mail: tsuboki@rain.hyarc.nagoya-u.ac.jp

「平成26年8月豪雨」に関する研究会(仮題)

日時：2014年10月20日(大会前日)17:30~19:30(メソ気象研究会の後)

会場：九州大学西新プラザ(福岡県福岡市早良区西新2丁目16-23)

場所：気象災害委員会とメソ気象研究会の共催研究会でプログラムはホームページ等でお知らせします (<http://meso.sakura.ne.jp/mesoken/index.html>)

連絡先：藤谷徳之助 (国立環境研究所地球環境研究センター内地球温暖化観測推進事務局)

E-mail: fujitani.tokunosuke@nies.go.jp

極域・寒冷域研究連絡会

日時：2014年10月21日(火)(大会第1日)セッション終了後2時間程度

場所：B会場

テーマ：「極域・寒冷域研究のこれから」

内容：2012年7月にグリーンランド氷床表面の全面融解が初めて観測されました。また、2012/13年の夏季には南極内陸部で氷床表面の融解の痕跡が初めて確認されました。こうした急激な気候変化をしつつある南北両極域に関する研究は、今後如何にあるべきでしょうか？今回の前半は、まずグリーンランド氷床表面の現状を青木さんに報告して頂きます。そしてJAMSTECや極地研で立案中の研究計画について猪上さんに紹介して頂きます。以上の講演を踏まえ今後の極域研究について参加者を交えて議論したいと思います。後半は、これからの極域、そして寒冷域の研究を担う大学院生に、ご自身の研究内容を紹介して頂きます。飛び入り参加も歓迎します。

プログラム：

1. 現在の知見から見える将来の極域研究
「グリーンランド氷床表面に関する最近の研究動向」
青木輝夫 (気象研究所)
「両極における大型観測研究計画の動向」
猪上 淳 (極地研究所/JAMSTEC)
2. 若手研究者による最近の極域・寒冷域研究
「東シベリアタイガ-ツンドラ境界域におけるメタン放出フラックスの観測」
新宮原諒 (北海道大学)
「温位座標に基づく寒気質量の長期変化」
菅野湧貴 (東北大学)
「南極における慣性重力波による多重圏界面の研究」
澁谷亮輔 (東京大学)
「冬季東アジアに寒波をもたらす西太平洋パターンの維持メカニズム」
田中 翔 (東京大学先端研)

連絡先：西井和晃 (東京大学先端研)

E-mail: nishii@atmos.rcast.u-tokyo.ac.jp

統合的陸域圏研究連絡会

日時：2014年10月21日（火）（大会第1日）セッション終了後2時間程度

場所：C会場

テーマ：「陸域起源の微量物質と気候変動」

内容：陸域は様々なサイズや種類の微粒子を大気に放出し、また大気からの沈着を受け取ることで気候システムに影響を与えています。黄砂などのダストや人為・生物起源の有機エアロゾルは、大気中の放射伝達や化学過程に影響を与えることが知られており、多くの研究が行われているところです。また最近話題のPM2.5のように健康影響が懸念されているものも含まれます。一方で、そのような陸域起源の微粒子については、生態学や農業科学の分野ではあまり重要性が認識されていないのが現状です。今回の研究連絡会では、陸域起源の微粒子に関する研究について2件の講演を行っていただき、議論を行いたいと思います（タイトルや講演者は変更になる場合があります）。

プログラム：

- 1) 陸域起源の微粒子と気候変動のモデリング
竹村俊彦（九大）
- 2) 全球エアロゾル輸送モデル（MASINGAR）を用いた気候研究等への活用について
眞木貴史，関山 剛，弓本桂也，大島 長，直江寛明（気象研），田中泰宙，小木昭典（気象庁）

世話人：伊勢武史（京大），市井和仁（JAMSTEC），大石龍太（極地研/東大 AORI），熊谷朝臣（名大），近藤雅征（JAMSTEC），佐藤 永（JAMSTEC），立入 郁（JAMSTEC）

連絡先：伊藤昭彦（環境研）

E-mail：itoh@nies.go.jp

地球観測衛星研究連絡会

日時：2014年10月23日（木）（大会第3日）セッション終了後2時間程度

場所：B会場

テーマ：「気象予報における衛星観測の役割」

内容：今回の地球観測衛星研究連絡会では、気象予報における衛星観測の役割について現状の紹介と今後の展望について、衛星観測と数値予報の観点から話題を提供していただきます。現在の気象予報は様々なデータが同化に用いられ、予報精度の向上に貢献しています。衛星観測データも、気象衛星「ひまわり」のみならず、様々な衛星による雲、水蒸気、気温などの観測データが利用されています。高度な数値予報業務は研究と表裏一体であり、研究者コミュニティが、その内容を良く理解し、研究成果を活かすことが重要です。また、このことが新たな科学的知見をもたらし、気象学の発展にもつながるものと考えます。どなたでも自由に議論に参加していただけますので、是非ご参集下さい。

話題提供者（予定）：

気象庁気象研究所 岡本幸三

「数値予報における衛星データの利用」

気象庁気象衛星センター 奥山 新

「次期静止気象衛星ひまわり8・9号の現状」

理化学研究所 三好建正

「データ同化の今後の展望」

世話人：早坂忠裕（東北大），中島 孝（東海大），別所康太郎（気象衛星センター）

連絡先：早坂忠裕（東北大学大学院理学研究科）

E-mail：tadahiro@m.tohoku.ac.jp

2015 年度春季大会の予告

2015 年度春季大会は、2015 年 5 月 21 日（木）～24 日（日）につくば市で開催される予定です。大会告示は「天気」12 月号に掲載予定です。なお、春季大会の講演申し込み締め切りは 2015 年 2 月頃となる予定です。